

アダム・スミスの思想世界の精神史的位相（２）

世界市民社会の「構想力の論理」のための予備考察・序説（２）

日本大学大学院 総合社会情報研究科 人間科学専攻 教授

佐々木 健

The Thought World of Adam Smith in its Intellectual-Historical Setting

– A Preliminary Discourse towards a Logic of Imagination
for the Society of Mankind (Weltbürgerliche Gesellschaft) –

Takeshi SASAKI

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This is an attempt to reevaluate the world of ideas of Adam Smith in an intellectual-historical perspective. Instead of judging his system of ideas simply in terms of whether it is “modern” or not, whether he is a founder of a system of “modern sciences” of society, or from a viewpoint of logical or theoretical consistencies in his system, the author considers the whole complex of his ideas at those points where two different dimensions of thought meet together. Intellectual experiments are made by putting his key concepts and main fields of intellectual inquiry at where a horizontal anthropological plane of each individual field of thought is crossed by a vertical cosmological or theological axis of a hierarchy of values and orders. In this manner, by locating his notion of “economy” in the hierarchical order of “divine economy”, “cosmic economy” and “political economy”, as well as in the context of the history of the notion of economy that traces back to the Aristotelian concept of “oikonomia”, we can get a definite notion of what “political economy” was about in its early days as a “modern” discipline, and also in what kind of climate of opinion and against what intellectual background it made itself into what it really became. This is a frame of reference in terms of which the author is going to examine the whole world of Smith’s ideas, so that he can understand what Adam Smith means to the present scene of philosophical thinking, and grope his way through an inquiry into what the Society of Mankind ought to be in the 21st century.

【キーワード】 想像力、 近代・近代社会、 エコノミー、 社会構造分析

・8 前の拙稿 「序説」(1) の末尾で、自立的な形成物を構築することを可能にするのが、想像力であり、Art としての構想力であると述べました。ここで、アダム・スミスにおける「想像力(=構想力)」の特質を簡単に見ておきます。

まず、スミスが想像力=構想力と言うとき、それだけで独立した精神的な能力を考えている訳ではありません。想像力=構想力というものがそのものとしてある訳ではありません。「実体的な能力ではないのです。むしろ、精神の営みがそこで行われる場と言えるでしょう。つまり、想像力=構想力は精神の地平として考えられているのです。したがって、想像力=構想力の働きという、そうした場の働きということになります。もちろん、「場」というものが先ずあって、これとは別に働きがあるということではありません。働く場なのであって、働きを離れて場は考えられない。

では、場としての想像力の働きとはどういうことなのか。例えば、私たちは、事態 A が生起すれば、その後に事態 B が出来るという「継起」を「予期」します。これは想像力とどう関連するのでしょうか。このとき、思考は観念 A から観念 B へと移行する。この移行に当たって思考は直接的な感覚のレベルにおいてではなく、想像力の地平で作用します。想像力は、類似の事例の反復的な継起の助けを借りざるをえない。だが、そのことによって、思考をそのように条件づけ方向づける。思考をそのように規定することを通じて、想像力という場は働くのです。観念と観念とを「結合」する。観念の体系が出来上がる。このことによって、想像力はその作用を現実的に示すのです。また、『道徳情操論』でスミスは、「当事者」(person principally concerned) と「観察者」(spectator) との間での「想像力による立場の交換」(imaginary exchange of situation) を語ります。観察者である私が当事者であるあなたの感情のなかに、あなたが私の感情のなかに、それぞれ「入っていき」(enter into) 互いにその感情の動きに「ついて行く」(go along with) という言い方をします。両者の感情が「一致」(agree) したときに、「同感情」(sympathy) が成り立つと言います。もとより、物理的な意味で、こうしたことはありえない。不可能です。そうではなく、想像力という地平で、私の感情とあなたの感情とが互いに他を映しあっている。そのことによって、私とあなたとの間での感情レベルでの了解が出来上がる。こうした形で場そのものが働く。想像力の働きとはこうした事態を指すと言ってよいでしょう。

そこで、次に、想像力=構想力は個体存在の次元においても、社会存在の次元においても働く、とすることができると言えるでしょう。いや、もっと正確に表現するなら、想像力=構想力はその根本において、私 あなたの関係性を包含する*のであって、このようなものとして、言うなれば、「共同主観的」な構造を内包している、それゆえ、想像力は個体存在の次元で働く局面でも、個人的な臆見の範囲を越えて、それなりの社会的な広がりを持ち、ある一定の「客観的妥当性」を有する、と言わなければならないでしょう。ある個人の「創造」による理論体系(それが人間界ではなく、自然界を対象としていても、です)であっても、それが社会的に受け容れられるということは、この個人が当該の社会の、実際問題としては大多数の、理念的にはすべての、構成員と同じ想像力の共同の地平に立っているからなのでして、このことは想像力の、それなりの社会的な広がりのためなのであります

* 拙稿「A.スミスにおける《自然》と《自然を超えたもの》 論文二篇を中心とした覚書」(『星薬科大学・一般教育論集』第10輯、1993年3月) 参看。

論文「天文学の歴史」のなかでスミスが、ある新しく構築された理論体系が社会的に受け容れられるにいたる理由を想像力の働きから説明していることは、先に述べた通りです。スミスの議論を突き詰めていけば、ある理論体系なり観念的な価値体系なりの「客観的妥当性」を 少な

くとも、ある一定の時代と社会の内部で通用する真理性を 保証する基準は、その体系が対象的な世界と一致すること（思惟と存在の一致、という真理基準）にではなく、理念的にはすべての、実際問題としては大多数の、社会構成員の、あり一定の想像力の地平からする「同意」*に存する、ということになります。大多数の社会構成員から「同意」されなければ、つまり、スミスの言い方に従えば、彼ら・彼女らの想像力が「ついて来て」くれなければ、どんなに正しい理論でも排除されてしまいます。ここから、知的な枠組みの転換ということも、「哲学的な「認識論」の問題にとどまらないことが了解されます。スミスは、想像力の「飛翔」、つまり、自己否定的な転換がなければ、枠組みの転換はありえない、と言います。

- * この「同意」という言葉は、かのリントン（Wrington）出身の先生の言葉です。こう見てくると、あの『人間悟性論』 御免なさい、「悟性」という訳語にもう少しこだわり続けます。ロックの「知性」、カントの「悟性」などと言いきるのなら、ロックの「悟性」、カントの「知性」、そして「カテゴリー」を「純粹知性概念」とでもしてみるほうが、よほど「コペルニクス的転回」の精神に合致しているのではないのでしょうかという長ったらしい本をば、飽きもしないで20年近くもかかって書き続けたヒョロヒョロの、喘息もちの先生の「同意」論がいかにか知的な意味でラディカルであるか、が分ります。

「人間の知識の源泉、確実性、および範囲、ならびに信念、臆見、および同意の様々な根拠と程度」という言葉のなかの「アセント」の語に着目する必要があります（どうしても、「知識」の方に注意が向かいがちですが）。スミス流に言えば、ある命題（認識への精神的努力の結果）が示す「観念の継起」に思考が「ついて行ける」から、暫定的にはあれ、その命題に「同意」する、ということになります。同意には責任が伴います。同意を撤回すれば（思考が当の命題について行けなくなれば）なお一層の認識努力が課せられます。ますます一所懸命に知らうと努めなければなりません。また、大多数の社会構成員が同意すれば、当の命題はしばらくの間は、「真理」として「通用」することになります。こうした観点から、『統治論』でいう「同意」（コンセント）を捉えかえせば、「政治社会」を結成することが必要であるという各人の「自然法」認識に、各人が互いに「入って行く」ができるから、互いに他の「自然法」理解に「同意」する、ということになります。したがって、「革命権」の発動とは、社会構成員が為政者の「自然法」解釈に「ついて行く」ことができないがゆえに、その解釈への「同意」を、生命・身体の危険を犯してでも拒むことを意味する、ということになります（この最後の点、一ノ瀬直樹東大教授の示唆による）。

ここに、私たちは「同意」理論の存立根拠をめぐって、ロックからスミスへの方角で、学説の外面的な「形態」の点では「否定」が、しかし思想の普遍的な「意義」においては「保存」が、行われている事情を看取することができます。ロックにおいて、「アセント」（assent）という「同意」は、対象に関する理論的な認識内容に関する「同意」を意味しています。「私」という認識主体が「対象」という物に自己を関係づける場面（つまり、《ich-es》の場面）で言われています。これに対して、「コンセント」（consent）という名の「同意」は実践的な社会的行為の内実に関する「同意」を指示しています。「私」という行為主体が「あなた」という、同様に行為主体である人格に関係する問題局面（つまり《ich-du》の局面）で使用される範疇です。このようなロックの「同意」理論の理論的基盤を、いわば搗き砕いて、理論的認識内容に関する「同意」も、実践的行為の内実に関する「同意」も、ともに、社会的共同性の地平での「協約」（共同的同意）であるとの理由から、「アセント」（assent）と「コンセント」（consent）との2項的な枠組みを破壊して、両者をともに含む高次の「コンセント」（consent）の地平を開鑿したのがスミスであるわけです。

このように、その根本的性格において、いうなれば社会的な広がりを与えていますので、「想像力＝構想力」は、（難しい用語を使えば）「自然の行程」の理論的認識、つまり「観念の継起」の

構成原理として働くばかりではなく、道徳・政治・法律の領域においても、人間社会の「結合原理」、人間的秩序の形成力として働くわけです。人々が明確な契約や取決めを結ばなくとも、新しい秩序を形成していきます。人々の営みを条件づけ方向づける力が作用しているからです。この規定力として働くのが「想像力＝構想力」です。想像力のこのような根本性格を想定しますので、スミスは言語の「起源」（＝「原初的形成」）を問題にするに当たっても、ルソーのように、言語の存在しない社会形成以前の状態と言語が形成されてある社会の状態を峻別するような問題の立て方を退けるのです。社会を形成するためには（つまり、何らかの契約を取り交すには）言語が存在していなければならないし、また逆に、言語が存在するためには、何らかの社会存在が前提されなければならない。これはルソーにとってはアポリアです。しかしスミスにとって、アポリアは存在しないのです。想像力＝構想力は人間の自然の「プリンシプル」であり、想像力＝構想力の基本性格は以上のようなものである。スミスはこうした前提に立ちますから、彼にとっては、ことからの本性からして、人間がこの世に置き入れられたと同時に、社会も言語も何らかの形で存在することになります。*

* 言語理論の系譜から言えば、明らかにカアコーディの先生は、あのヴェルラミウム、マームズベリ、そしてリントンの先生たちが「アダムの言語」的な言語観を批判した精神を継承しています。

さらにまた、想像力＝構想力は人間の外官（外的諸感官）や身体とも結び付きます。あのクロインの主教を務めた哲学者が主張するように、視覚の対象が触覚の対象を「示唆」するのはどうしてなのでしょう。ただ「経験」にだけ基づくのでしょうか。絵画という「芸術」で、ただ平面に色を塗るのにすぎないのに、作品は奥行きと広がりをもつのはなぜなのでしょう。生後間もない乳児が母乳を飲みたい一心に母親の乳房に上手に自分の口をあてるのは、ただ「本能」がそうさせるからなのでしょう。想像力＝構想力は、ある感覚と他の感覚とを関連づける。関連づけることによって、感官を技術化する。技術的な性格を付与します。身体についても同様です。わたしたちは声帯を震わせ発声器官を使って声を出す、話したり歌ったりします。身体を動かして運動したり、意味を帯びた動作をします。身体は技術的な性格を帯びています。何らかの媒体として機能します。さらに、わたしたちが何らかの物を使って他の物に働きかけます。身体の一部ばかりではなく、身体の外物をも「インストルメント」として作用させるのです。楽器を操作して器楽曲を演奏したり、道具を器用に使用して物を生産します。あのでっばらのお兄さん先生は、「自然の行程」と「観念の継起」との間の「予定調和」に触れた箇所で、「自然はわたしたちに四肢の使い方を教えこすすれ、それらを運動させる筋肉や神経についての知識をわたしたちに与えなかった」と言っています。何気ないにもかかわらず、重要な言葉です。「四肢の使い方」を技術化するのが想像力＝構想力の働きであるわけです。

以上、スミスにおける想像力＝構想力の特徴を2、3の点にわたってみてきました。こうした想像力＝構想力が根本にあって、その働きによって、「自然の業（＝技）」を「模倣」することも、自然が成し遂げないことを「完成」することも可能になります。想像力＝構想力の働きによって、人間の自然は自然を模倣することも、自然の営みを完成させることもできるようになります。

ところで、もしスミスの思想世界がこうした地点にとどまっているとすれば、それは、いわば「内在」の地平を出ていないことになるでしょう。想像力＝構想力の働きによって、人間の身体と身体の外物が技術的な性格を帯びて、自然が産出することのできないものを創造する、という場合、人間の身体とその外の物は人間にとって、この創造のための道具として機能する、と言うことができます。スミスの思想世界の拡がりはこちらで途絶えてしまうのでしょうか。人間が、自然が産出することのできないものを創造すれば、それで万歳、人間バンザイ、なのでしょう。人間の行為には、そこへと向かう「終局」がないのでしょうか。もし、自然が産出することので

きないものを人間が創造すること、このことを自然が意図している、とするならば、そのことはこういうことではないでしょうか。自然が成し遂げられないところから先は人間の営みに任せ、世界創造（創造は一回限りの行為ではなく持続的な過程であるとすれば、その過程）の「終る」ところまで人間の創造を向かわせることは、自然の「創造者」がもともと意図したところである。したがって、人間は自己と世界を完成させ、そのことによって創造者の世界創造の「目的」を実現する使命を負わされている。これが「神の似姿」としての人間の使命である。ここから、人間は神に代わって創造目的を実現するインストルメントとして働くという役割を担わされることになります。

・ 1 これまで見てきたことを踏まえながら、最後に、スミスの思想世界の、いふなれば「形而上学的前提」を開示し、スミスの思想世界の精神的位相を確定するという意味を込めて、大胆な仮説を立ててみます。スミスは近代社会の真只中で、しかも形成途上の近代社会の真只中で、その歴史的形成の当事者として生きた「近代人」であることは言うまでもありません。そのスミスは、同時にまた最後の「中世人」であったのではないか、しかしまた、まぎれもなく「近代人」として、近代社会の担い手として、近代の栄光と悲慘を背負い、近代の行き着く先を予料していたのではないか、という仮説です。筆者のこの仮説にひとつの光を当てるためにも、以下のような考察を行ってみようという訳であります。

2 先ず、 ・ 6の例にならって図式を示します。ここでは、トリアーデを3つ横文字で示します。

- a music of the spheres(cosmic economy) – natural philosophy – system of astronomy
- b musica mundana – musica humana – musica instrumentalis
- c lex aeterna – lex naturalis – lex humana

a~c のトリアーデを ・ 6の(1)、(3)、および(4)・(5)と対比してみましょう。(4)と(5)はさしあたり、ここでは便宜上、1つに纏めておきます。aと(1)、bと(3)、そしてcと(4)・(5) という組み合わせになります。

3 a、b、cのそれぞれにおいて、第1項のもの(a「天球の音楽」・宇宙の基本構造ないし運行の根本機制、b宇宙・世界の音楽、c永遠法ないし永久法)は人間の存在と意識から独立に存在しているものと見なされるものです。

第2項のもの(a自然哲学、b人間の音楽、c自然法)は(1)~(5)のなかの「人間の自然本性の基盤」の部分に当たります。

第3項は ・ 6で の次に掲げられたもの(構築物・形成物)に対応します。

したがって、スミスの図式では、第1項のものが抜けております。

以上のことを確認したうえで、次に組み合わせの一つひとつについて見ていきます。

4 aと(1)について。

「天球の音楽」という考え方はもともとピュタゴラスの思想に由来します。宇宙(コスモス)は音楽の世界と同じ数学的原理によって構成されていますので、天体は運行の際に人間の耳には聞こえない絶妙な音楽を奏でます。この考えが、ポエティウスに継承されて「ムシカ・ムンダーナ」の思想として定式化されます。また、これと同時に、「天球の音楽」という言葉は宇宙の調和を表す言葉として「天文学」と同義に使われるようになります。宇宙を楽器(monochord=一絃楽器)になぞらえて描いた絵(ロバート・フラッドによる絵)があります。宇宙のハルモニアの

思想はケプラーからニュートンにいたる宇宙論の根柢にも流れています。乱暴な言い方であるけれども、極言すれば、天文学の理論体系はこの宇宙の美と調和を「思想」のなかで数学的な言語によって表現しようとして構築されました。(関連して、「自然は数という言葉によって書かれている」というガリレイの言葉を想起しておくことが重要でしょう。)

これによって見ると、スミスは美的調和をもった宇宙そのもの(実在としての宇宙)と、「思想」のなかの、いうなれば観念体系としての宇宙(理論としての天文学体系)との間に、両者の中間に、人間の自然を置いて考えていたことが分ります。なにゆえに、人間の自然は、また想像力=構想力は、思想のなかに観念体系としての宇宙を構築する基盤となりうるのか。自然(宇宙的自然)を映し出す鏡としての人間の自然、言い換えれば、harmony と concord を自己本来のエレメントとする human nature という暗黙の前提がなかったか。宇宙的自然と人間的自然(macrocosm と microcosm)との間に照応関係*が想定されていなかったか。

* この照応関係を精神的与件として念頭におけば、カントの『天界の一般自然史および理論』(Die Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels)の最後の部分で、「魂」の問題が突然出てくるのは何故かが容易に了解されるであろう。

なお、スミスはそうした宇宙の美的調和を維持するのは何であると考えていたのでしょうか。宇宙の創造者を想定していたことは事実でしょう。しかし、これを機械のネジを巻く機械工のようなものして考えることを拒んでいたのは確かである、と思われまふ。一旦創造されてしまえば、それ自身の自律的、内在的な原理(法則)にしたがって運行し、創造の原初点で創造者の「悟性」のうちにあった美的調和のイデーを実現し完成する方向に進むもの、という宇宙のイメージ(カントが『一般自然史』で描いたような宇宙像)が、ことによるとスミスの念頭にもあったのではないのでしょうか。

5 bと(3)について

ムシカ・ムンダーナは「天球の音楽」の思想から来ていることは4で述べた通りです。(そして、同じムシカ・ムンダーナはキリスト教の文脈の中で《musica coelestis》へと発展していきました。)美しい数的な比例関係によって表現されるような宇宙の秩序の調和のこと、あるいは調和の構成原理です。もちろん、これは人間の耳には聞こえません。17世紀フランスのお坊さん、M.メルセンヌ。この人は、あのデカイ鼻をした、ひとを食ったような顔をした「私は考える」哲学者のよき理解者でありました。このメルセンヌの『アルモニ・ユニヴェルセル(宇宙の普遍的調和)』(Harmonie Universelle)はこの世界を問題にしています。スミスがエッセイ「模倣的諸技芸」のなかで2度ほど名前を出しているヘンデルが曲をつけた「聖セシリアの日のための頌歌」(同じ日のための頌歌を、17世紀の80年代に「オルフェウス・ブリタニクス」が作曲しています)は、「音楽」が宇宙創造から最後の審判まで、いやその後まで働き、世界の調和を形作る壮大な宇宙のドラマを謳っています。

さて、このムシカ・ムンダーナが「人間の自然」に「分与」されたものがムシカ・フマーナ。先に、ナチュラル・ミュージックと呼んだものにあたります。宇宙の調和が人間の自然に映し出された姿です。「自然の声」が人間の自然に、いわば語っている。これを通路にしてはじめて、人間は宇宙の調和に参加します。これを知る自分の内に快い調和ある秩序を感じる。「感じられる」ものですから、「人間の音楽」といっても声や音を出さない。スミスが「音楽的な情念」と呼ぶ精神の秩序の調和です。さらに、ムシカ・フマーナが音を出す「音楽」になるには、ムーサ(ミュージック)の力を借りなければなりません。ars musae, ars musica。この技術の力で、身体の一部(発声器官)や身体の外のをインストルメントとして用いて音を出す。声乐と器楽です。こ

れがムシカ・インストルメンターリス。

なお、ピュタゴラス学派にとって、音楽は「魂の解脱」をもたらす儀礼の一部でありました。器楽という、純粹に楽器の音だけで構成される自立的な体系的な世界は心の「平静と沈着」をもたらし、あるいはこれを維持するものである、とスミスが評価していることは、以上のことに関連して注目に値します。

こうした世界構図を描きながら、スミスの音楽論を辿ると、その脈絡がよく理解できます。また、彼は実際、こうした構図を前提しながら、議論を進めているように思われます。

6 cと(4)・(5)

永遠法・永久法 自然法 人間法・人定法という法の序列は13世紀の盛期スコラの集大成者、聖トマスにおいて整然とした形で示されます。神の理性のなかで想い描かれた宇宙創造と宇宙統治の design = 見取り図、これが永遠法です。いわば神の永遠の理性の内に表出された規範としての永遠法は、それ自体において存在します。そのものとしては人間には分りません。これが人間の自然に分与されたのが自然法にほかなりません。人間の自然という場面において、神の理性は自然法という形に限定されて、人間に開示されます。自然法の諸規則に従いながら、人間の立法者が制定し公布する「理性的な」諸命題が人間法。

以上の記述によって、「人間の自然本性の基盤」における(4)のナチュラル・モラリティ、(5)のナチュラル・ジュアリスプルーデンスは、「自然法」の場面に相当することが分ります。また、スミスのナチュラル・ジュアリスプルーデンスというカテゴリーは「自然法」の概念を含む、と先に述べたのは、こうした問題の文脈においてであります。さらにまた、この問題局面において、スミスの思想世界は、古代以来の自然法思想の伝統に連なります。中世を通過して、そう、あの R. フッカー先生に至り、彼を経て17 - 8世紀に大々的に展開される自然法思想の伝統です。*

* 人間が政治社会を結成するのは、いっそう自然法にかなない、よりよく生きるためであり、あわせて政治的統治が樹立されるのはただただ人間の所有権を保全するためである、というロックの思想の根本を、ここでは想起するにとどめる。

それから、(4)ナチュラル・モラリティとの関連で、永遠法 自然法の系列を別な観点から言い換えれば、the voice of reason and the author of nature the voice of nature となります。神の声、神の理性の声、これを「聴き取る」(vernehmen)「受け皿」が「良心」です。人間的自然の根源的な中枢に位置する良心の声、これが「自然の声」です。スミスは、同時代人や少し前の時代の先輩たち*が使った「……の声」という言い回しはしません。だがしかし、良心の意義は彼ら以上に強調します。良心、本来はコン・スキエンティア。神と人間とが互いに他を「共に知る」場です。そこで、スミスはこれを demi-god と呼ぶわけです。

* George Berkeley, Henry Purcell, Alexander Pope, Joseph Butler 等。

7 以上、何組かのトリアーデを引き合いに出して、これとの関連でスミスの思想世界を瞥見してきました。古代・中世以来の世界構図という枠組みのなかにそれを置き入れて見たわけですね。前にも言った通り、各トリアーデの第1項のものはスミスの発言・現表において触れられておりません。しかし、そのことは、スミスのテキストに関して言えるに過ぎないのではないのでしょうか。テキストに即して言えば、文章の表面には現われていない、ということなのではないのでしょうか。コンテキストについて言えば、スミスの議論はそうした世界を想定していたのではないのでしょうか。彼の議論を脈絡付け方向付けるものとしてあったのではないのでしょうか。もっと

正確に言えば、「自然……」の「人間の自然本性の基盤」を支える根拠として、言うなれば神学的な、「形而上学的な」世界が想定されていたのではないのでしょうか。むしろ、スミスは、そうした「形而上学的な」世界を単なる所与のものとして受け取るのではなく、むしろ逆に、art によって *artificially* に再構築されたものとして解明し、またそのようなものとして描出しようとしているのではないのでしょうか。*

* この地点において、私たちはスミスにおける極めて重大な1つの問題群に達することになる。しかし、ここではこの点に触れないで、別の機会に追究することとする。

8 スミスの思想世界を論じているのですから、最後に“*Political Economy*”という観念に言及しないわけにはいきません。

ここでは、「経済(学)」という言葉はそもそも日本語の語彙にはないものとして話を進めることにしましょう。(あのマームズベリの先生の「世界消滅」の思考実験をこの言葉に適用してみましょ。)

「……人間の解剖は猿の解剖に対するひとつの鍵鑰である。……こうしてブルジョア社会の基本構造ないし運動の根本機制は古代やその他の社会の基本構造、運動の根本機制を解明するための秘鑰を提供する。しかし、それはけっして、すべての歴史的な区別を消失させ、すべての社会構成体のなかにブルジョア的社会構成体を見る社会構造分析学者たちのやり方によってそうである、というのではない。」(S. 253)

ある有名な思想家・哲学者の『経済学批判』と題する著書の一部をあえて試みにこのように訳してみました。この文章に、違和感を抱かせるような不自然なところがないのであれば、あるいは、これで意味が通じる日本語の文章であるのなら、それで結構です。考察を進めましょう。

もちろん、語ないし観念の発生論的な考察の観点から言えば、*political economy* という語ないし観念が確立されるようになるにつれて、これとの対比で、かつての「オイコノミア」が *domestic / private economy* と呼ばれるようになりました。この *private / domestic economy* に対して *political economy* あるいは *public economy* という言葉が使われるようになったわけです。家産国家から統一的な主権的国民国家へという歴史的過程なかで *political economy* あるいは *public economy* という言葉が前景に踊り出てくるという事実経過があります。これはこれとして踏まえなければなりません。しかし、ここで問題として正面に見据えたいのは、*political economy* という語ないし観念を支える精神のあり方です。

そこでまた、もう1つ、トリアーデを示します。

divine economy/cosmic economy *human economy* *political economy*

順次、見ていきます。

先ず、ディヴァイン・エコノミー。「神の世界(宇宙)経綸」という訳語がしっくり行くかもしれません(アルコールに弱い筆者は、3人寄ればお酒に「酔」い、あるいは1人で飲んでも3人分も酩酊しがちです。ですから、どうしてもこの漢語を使用したくなります)。しかし、この訳語では納得できないところもあります。厳格なディヴァイン・エコノミーがあり、これを把握するために、これまた極めて厳格な神学的理性が構築された、そして、こうした理性があるからこそ、自然のおよび社会的世界の構造分析を行なうことができる強力な「理性」も構築された、というヨーロッパ精神史の事実があります。この事実を念頭に置かなければ、くだんの漢語はこの事実を覆い隠してしまう恐れがあります。そのため(しっくり行くだけに、なおさら)この訳語を撤回せざるを得ません。神の(被造的世界に対する)統治の基本構造ないし根本機制としておきます。これを「観想」するのが神学。次に、コスミック・エコノミー。ディヴァイン・エコノミーが宇

宙において表現されます。宇宙の基本構造ないし運行の根本機制。これを解明するのが「自然哲学」あるいは広義の「魔術」(占星術・錬金術)の課題です。このコスミック・エコノミーを解明しようと最大限の努力を惜しまなかった代表的な人物は、言うまでもなく、ほかならぬ I・ニュートンでありました。

ディヴァイン・エコノミーが直接に、あるいはコスミック・エコノミーを介して、動物に及ぶと、これがアニマル・エコノミー (animal economy) となります。動物組織の基本構造ないし運動の根本機制ということです。解剖学はこれを解明する*。医学は、というより伝統的には ars medica は、ヒューマン・ボディの、人体のエコノミーの解明を通じて、そこにディヴァイン・エコノミーの表出を読み取ろうとする。血液循環の発見者である W・ハーヴェイは、人体の運動、そしてまた血液の運行のなかに、“providential cause” を認めていました。また、ロック、T・シドナム、R・ロウア、R・ポイルといった人たちが学び研究した医術・生理学は、こうした敬虔なモチーフを秘めた学問でした。それから、ヒューマン・エコノミー。人間の、あるいは人間的な自然の、基本構造、行動の根本機制。ダラムのお坊さんを務め『類比』の著書でもある人物の言葉を借りれば、economy or constitution of human nature ということになります。あるいは、ヒュームは economy of mind という字句を使用しています。このようなヒューマン・エコノミー、何よりも先ず、「モラル・フィロソフィ」の探究領域です。

*興味深いことに、表ないし図 (tables) を作成することを重要な不可欠の基礎作業とする学問の代表的な例として、「天文学」、「解剖学」および「ポリティカル・エコノミー」を挙げることができる。astronomical tables、anatomical tables (まさしく「ターヘル・アナトミア」!) および tableaux économiques (F・ケネーの著書はまさしくこれ!) である。

このヒューマン・エコノミーを「社会」において見たとき、あるいは、社会全体の基本構造、運動の根本機制にうつしかえるとき、これがポリティカル・エコノミーということになります。こうした意味において、ポリティカル・エコノミーという語ないし観念は先ず、対象的な世界を、その世界の基本構造、その運動の根本機制を指示するものであったのです。対象的な世界としてのポリティカル・エコノミーをば、「思想」において観念体系として組織する学が、これまた、ポリティカル・エコノミーであります。観念体系あるいは学としてのポリティカル・エコノミーは、社会全体の体系的秩序ないし基本構造、運動の根本機制としてのポリティカル・エコノミーを思想の中で把握し解析し分析するものとして形成されることになったわけです。統体としての社会全体の基本構造、運動の根本機制の分析の学であるのです。ポリティカル・エコノミー、これいふならば、「機構」であり「分析」なのであります。あわせて、「ブルジョア社会のアナトミーは、これをポリティッシュ・エコノミーにゆだねなければならない」という有名な言葉を想起しておく必要があるでしょう。

その「機構」についてあります。ボディ・ポリティック (body politic) という統体としての社会全体の基本構造、運動の根本機制を把握し分析するには、先ず、対象的な世界に「従わ」なければなりません。アルス・メディカは、人間のアニマル・エコノミーに「従属」することによって、このエコノミーを正確に分析する解剖学の「知」を踏まえなければ、ヒューマン・ボディを健康にし、あるいはその健康を保つための「力」とはなりえません。自然界の「事象記述」(ナチュラール・ヒストリイ) を踏まえることなしには、コスミック・エコノミーの把握は叶いません。統体としての社会全体の基本構造、運動の根本機制を把握し分析する努力なしには、「富」を産出し、人間の自然 (= 自然本性) の「完全性 (完成) と幸福」に適う方向へと社会を導く力は得られません。*

* それゆえ、“science of a legislator”としての political economy といふとき、それは以下のようなものでなければならぬことが含意される。すなわち、社会（body politic）の全体的秩序、基本構造、運動の根本機制を正確に十全に把握し、body politic の正常な作用・機能とは何かについての冷徹な洞察を踏まえて、市民・国民がその生来の資質を開花させることのできる社会的物質的条件を整備する（言い換えれば、“perfection and happiness”のための「質料」的条件を究明し確保する）ことを主要課題とする理論である、ということ。

・1 人間が究極的には神の統治下にあるという感情、「神の似姿」として自己を定位する意識。「近代」とその社会とが、すべてが神とともにあり神の内にあると思念した世界＝「中世」的な世界からかなり隔たってきたとはいえ、上のような感情や意識を保持しているかぎり、「中世」的な価値意識の磁場から完全に離脱しきった、とは言えないでしょう。スミスの思想世界にはまだ、そうした磁場が働いています。その意味では、スミスは「最後」の「中世」人の、少なくとも1人に数えることができるのではないのでしょうか。

2 しかしまた、スミスは、まぎれもなく「近代」世界に生きた人です。いやおうなしに「中世」的な価値意識の磁場から万人を引き離す力が働く世界の真只中に自己を置いていました。その力の赴く先は何であったのでしょうか。しかし、人類は今、フッカーからスミスにいたる歴史的行程を逆に辿りながら、「中世」の方向へと向かいつつあるかに見えます。もとより同じレベルにおいてはではありません、一段高い水準においてであるのか、下降線を描いて坂を下りつつあるのか。もとより、断言はできません。あるいは、このような問いの立て方自体が誤謬である可能性は排除できません。

しかし、最後に、次のような言葉の意味を噛みしめてみましょう。「根底〔＝根拠〕と再び結びつく〔＝再結合する・re-ligio〕」、とは本来どういうことであるのか、を想起しながら。

アメリカの著名な「思想史・観念史」研究の唱道者であった A・O・ラヴジョイが中心になって編集された A Dictionary of History of Ideas が「ヒストリー・オブ・アイディアズ叢書」として日本語に訳されたことがあります。そのなかの1分冊『神の観念史』のなかに、次のような記述があります。

「人間は世俗化の時代においてさえ宗教的存在であり、また自己の本質の実体と行為の対象すべてにおいて、究極的な聖なる次元との本質的な連関のうちに存在している。こうしたことが実情であるとするならば、徹底的に世俗的な人間理解にもとづいた、言語の純粋に世俗的な使用法や、人間の自律だけによりかかった信仰は、悲しいかな究極的には崩壊するであろう。日常生活の全諸相を根拠づけている聖なる次元は、自己自身の象徴的な言葉によって、また歴史的共同体における彼ら自身のユニークな経験を根拠に、『神』と名付けられているのである。世俗文化は『神』の存在のこのような深みとの接触を失いやすいものであった。……われわれの文化が自分の存在・秩序・希望のこのような根底と再び結びつき、宗教的言説　その中心的・統一の象徴が神という象徴である　の古典的な象徴を現代的で適切な形式で再び自分のものとして用いることを学ぶならば、それは強力にして活力あるものとなることができるのである。」(p.177-8)

一方では、スミスは、まぎれもなく、形成途上の「近代」という時代とその時代の社会に身を置きながら、現に生成しつつある「近代」を、近代社会形成の歴史的当事者として推進する役割を自ら引き受けていたのであります。しかし、反面他方では、「中世」的な価値意識の磁場から完全に自己を遮断しきっていないものとして、いわば、「近代」の入り口、近代社会の敷居の位置から、単に、眼前においてその実相を顕に示しつつある形成途上の「近代」を、冷静に眺めていたわけではありません。その地点にとどまらないで、スミスは「近代」と「近代社会」の只中に生きる当事者の立場をはるかに超えて、「近代」と「近代社会」との行き着く先の、その先を見据えていたかのように思われます。

「近代」に生きる純粋の「近代人」であり、「近代社会」の推進者であるとともに、それと同時

に、「近代」そのものが孕んでいた危機に対する批判的な懐疑者でもあったわけです。もしかして「近代」そのものが人間存在の根底的な部分をつき砕いてしまうものを秘めているのではないだろうか。彼自身の著作のテキストから、このように断定できると主張しているではありません。そうではなく、彼の著作のロジカルなコンテクスト、彼自身の思想形成の閲歴と人生観・社会観における微妙な内的変化とも見なせることを想定してみると、彼は、あたかもそのような両面の顔をもった思想家であるかのように、思いなすことが可能である。このことを示唆しようとしているにすぎません。しかしながら、「あたかも……かのように」に思いなすことによって、積極的な認識の「構成」に資することはできないにしても、たとい消極的な認識者の自己「統制」という形式ではあっても、スミスの思想世界に、何らかの新たな相貌を「発見」することのできる可能性を排除することはできないのではないか。迂遠な道程を辿ってであっても、もし新たな「発見」があれば、それは単にスミス自身の思想像に何らかの修正を迫るばかりではないでしょう。むしろ、私たち自身が、自分の生きる「現代」という時代とともに、歴史的批判の俎上に上がるべきものとしての相貌を呈してくるのではないのでしょうか。この手続きを抜きにして、私たちは「世界市民」という人類普遍の地平に出て行くことはできないのではないのでしょうか。

REFERENCES

(本稿の執筆に際して参看したもの、本稿のテーマと関連のあるもの、あるいは本稿のテーマに直接ないし間接的に論及したものの、ごく一部のみ掲げる。)

(The following list is not exhaustive nor is methodically made on principle; it simply contains a very limited number of those books that are connected or concerned, even if partly, with the subject of this essay.)

- G. R. Morrow, *The Ethical and Economic Theories of Adam Smith*, Longmans Green, 1923.
 J. R. Lindgren, *The Social Philosophy of Adam Smith*, Martinus Nijhoff, 1973.
 A. S. Skinner and T. Wilson (ed.), *Essays on Adam Smith*, Oxford University Press, 1975.
 A. S. Skinner, *A System of Social Science: Papers relating to Adam Smith*, Oxford University Press, 1979.
 K. Haakonssen, *The Science of a Legislator – The Natural Jurisprudence of David Hume and Adam Smith*, Cambridge University Press, 1981.
 D. D. Raphael, *Adam Smith*, Past Masters Series, Oxford University Press, 1985.
 J. A. Farrer, *Adam Smith*, J. Martin Stafford, Altrincham, 1988.
 J. T. Young, *Economics as a Moral Science – The political Economy of Adam Smith –*, Edward Elgar, 1997.
 K. G. Ballestrom, *Adam Smith*, Verlag C. H. Beck, 2001.
 J. R. Otteson, *Adam Smith's Marketplace of Life*, Cambridge University Press, 2002.
 J. E. Alvey, *Adam Smith: Optimist or Pessimist? – A New Problem Concerning the Teleological Basis of Commercial Society –*, Ashgate, 2003.
 水田 洋『アダム・スミス研究』未来社、1968 .
 只腰 親和『「天文学史」とアダム・スミスの道徳哲学』多賀出版、1995 .
 田中 正司『アダム・スミスの倫理学』(上・下) 御茶ノ水書房、1997 .
 内田 義彦『社会認識の歩み』岩波書店、1970 .
 同 上 『作品としての社会科学』岩波書店、1981 .

- 佐々木 純枝『モラル・フィロソフィーの系譜学』勁草書房、1992 .
- 荒川 章義『思想史のなかの近代経済学』中央公論社、1999 .
- 馬場 宏二「経済という言葉 意味・語源・歴史」, Research Papers No.J-44、Institute of Business Research, Daito Bunka University、2004 .
- I. Hont and M. Ignatieff, *Wealth and Virtue – The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment* – , Cambridge University Press, 1983.
- E. Cassirer, *Die Philosophie der Aufklärung*, Verlag von J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, 1932. 英訳と邦訳は以下の通り。
Cassirer, *The Philosophy of the Enlightenment*, translated by F. C. A. Koellen and J. P. Pettegrove, Princeton University Press, 1951.
- 中野 好之訳『啓蒙主義の哲学』紀伊國屋書店、1962 .
- J. Dewey, *Reconstruction in Philosophy*, Enlarged Edition with a New Introduction by the Author, Beacon Press, 1948.
- M. Nussbaum, *Poetic Justice: The Literary Imagination in Public Life*, Beacon Press, 1996.
- Ditto, *Cultivating Humanity*, Harvard University Press, 1997, esp. Chap 3 'The Narrative Imagination.'
- 三木 清『構想力の論理』（『三木 清全集』第8巻所収）岩波書店、1967 .